

大学の改革



巻頭言



金 森 順次郎*

大学の組織は、教育研究の発展に応じて、絶えず改編されるのは当然のことであって、事実大阪大学では、先人諸賢のご努力で、他の国立大学にさがけて多くの新しい学部等が設置された。また、昭和40年代の紛争以来、大学内外で大学改革について多くの論議が行われた。しかし、我が国の大学制度の骨格を規定している法令の見直しはこの数年間のことで、昭和62年に設置され現在も続いている大学審議会の答申に基づいて実施されている。その結果、大学教育についての細かい規制の撤廃や大学院制度の弾力化が平成3年までに実現し、対応して各大学でカリキュラム、組織等の改革が進められている。大阪大学でも、平成6年度から改革が緒につく予定である。しかし、どのような新しい組織でも、新しい教育研究の発展を目指す「志」が宿っていなければ、改革の実は上がらない。その点について、自然科学のこれからの趨勢と関連して感想を述べたい。

20世紀前半の科学は、量子力学からDNAにいたるまで、ミクロの世界の解明を特徴としていた。この方向の研究は自然の構造について多くの知見と多彩な技術を生んだが、反面、科学の細分化をもたらしただけでいい。最近、多くの人が、これからの科学の方向と

して、自然のより複雑な働きの理解、あるいは全体像の把握を挙げている。マクロな体系のもつ多様性の研究には、科学の様々な総合化、さらには、科学と技術の融合が必要になる。

これまでの自然科学は、自然のごく一部を切りとって、丹念に調べていた。一方、技術は人間が実際に自然に立ち向かうときの武器であった。自然を構成する要素を探究するミクロの科学でも、測定手段としての技術が必要であったが、自然の働きを理解しようとするマクロの科学では、技術はより本質的な役割を果たすのではないだろうか。技術によって自然の働きの一部を再現して、始めてその本質の理解が進む場合が多い。例えば、最近ヒューマン・フロンティア・サイエンス計画で論争になったように、脳の研究の場合、伝統的な生物学的方法だけでなく、技術によって脳の働きを再現するコンピュータ科学的方法が重要となるだろう。

伝統の継承発展が自然科学系の分野においても考慮されなければならないことは当然であるが、大学改革において学問の新しい総合化も当然に考慮されるべきことであろう。学部、研究所、さらには講座、部門等の大学の組織区分を考えると、学問の発展が生んだ多様な観点が存在し、伝統と斬新さの葛藤に悩む場合が多い。根本的には、大学人それぞれが、教育・研究に組織に由来する壁を作らない「柔軟さ」と学問発展への「積極性」を持ち、本来、組織区分は便宜的なものであるという認識から出発することが大切であろう。

*Junjiro KANAMORI

1930年3月7日生

昭和28年3月大阪大学理学部物理学科卒業

現在、大阪大学総長、理学博士(大阪大学)、物性理論

TEL 06-877-5111